

12月7日 チェロサロン開催

主宰:堀 了介先生 於:サントリーホール リハーサルルーム



当日は生憎の小雨となりましたが、10名の参加者にお集まりいただきました。参加者全員で様々な曲のアンサンブル演奏に挑戦いただいたり、堀先生と、やはり会員の堀沙也香さん（堀先生のお嬢さん）、真籠泉さん（マゴメ イズミ＝沙也香さんのご友人）のピアノ伴奏によるチェロ二重奏を披露いただき、約2時間のチェロサロンをお楽しみいただきました。



アンサンブル演奏では、♪グルトマッヒャー「コンセレーション Opus.65」、♪バッハ「アリア」、♪ゴルターマン「ロマンス」、♪デ・スウェール「エレジー」を。1曲終わるごとに“アンサンブルは原則的に動きのあるパートの人、つまり細かいオタマジャクシの音符の人が、部分によってリードする気持ちでやや強めに弾いてみると、全体がよりメリハリのあるものに”“ドッペルのときに低音を気持ち強めに心掛けてみて”…等々、堀先生からのアドバイスを得ると途端に音が変わる様を目の当たりにし、ちょっとしたアドバイスでこんなにも違うものか、と感じ入りながら事務局一同も聴かせていただきました。



「あまりこんな機会はないんだけど…」と少し照れながら？堀先生と沙也香さんの親子共演によるチェロ二重奏、ヘンデルの「ソナタ」をご披露いただきました。（pf＝真籠 泉さん）息のあった2台のチェロに会員の皆さんもしばし聴き入っておられました。この曲はそれほど

演奏機会が多くないものの、確かその昔トゥルトゥリエなどが好んで取りあげていたと思いますよ…といった先生からお話も。



アンサンブルを楽しんだ後は、会員の皆さんからの質問に、堀先生にお答えいただきました。

Q：（R-002の藤田正厚さん）

アンサンブルを弾く際に、例えばビブラートのかけ方（速度）を合わせたほうが綺麗に聴こえると思いますが、どんな練習をすればいいのでしょうか？

A：（堀先生）

ビブラートを合わせれば音色は揃うけれど、果たして音楽的にはどうでしょうか。確かに、カルテットの場合だと、あたかも1つの楽器のように揃っているのも魅力的かも知れませんが。ただ、それより大所帯になった場合、オケともなると、そもそも揃えようとするのも難しいし、全体に音色が細く瘦せた印象にもなる場合も。各人の個性がそれぞれに出ている場合、それが音の厚み、温か味や面白さを生むとも言えるでしょうね。もちろん演奏する曲目にもよりますが。好き好きですが、僕はオーケストラ（大所帯）の場合は後者の方がより好きですね。わかりやすく喩えるための相対論ですが、ベルリン・フィルは統制の取れた音色の揃ったタイプのオケ、ウィーン・フィルは各人各様の個性そのままの音が集まったオケ、という感じがします。どちらが良いかは一概には言えませんが。

Q：（R-143の末松悦子さん）

ピチカートがどうしても惨めな音に音になってしまいます。良いピチカートとは？どのようにすれば上手いくのでしょうか？

A：（堀先生）

大切なのは、左手ですが、普通に弾くときよりしっかりと指板を押さえること。指をはじく方向やはじき方は、その時に欲しい音、出したい音の情景によって変わりますので、一概に「こうすればいい」というのはないと思います。

チェロサロン参加レポート

岡本 滋 (R-200)

「なにっ!?サントリーホールのリハーサル室でチェロサロン?しかも堀先生!?これはぜひとも参加しなければ…」。事務局からの案内を見た瞬間、参加を決めました。私は今年の5月に入会した為、チェロサロンなるものは今回が初めてです。楽しみにしながら12月7日を待ちました。

さて、当日。生憎の雨の中、重いケースを抱えてサントリーホール・リハーサル室へ。

さすがにサントリーホール。エレベーターもグランドピアノが乗るようになってるし、お揃いのジャンパーを着た人もいるし…。完全に舞い上がってました。

堀先生も既にいらっしゃっており、そこで早速ハードケース談義が。私のケースを見て堀先生曰く「このケース重たいんだよね〜」「よくご存じで。日本一、重たいケースです」と変な自慢してました。

サロンは15:00から始まり、皆で一緒に4曲程度弾きました。パートを4つに分けて弾いたのですが、最初の曲で各パート1人ずつで弾くことになったのには「ヤバ

〜〜ッ…」。全然弾けず、緊張しまくりで気が付いたら終わっており、その後しばらく落ち込んでました。

それでも堀先生から直接話を聞いたのは感激でした。「普通のオケで弾いてると自分の音が合ってるんだか間違ってるんだか分からなくなる時があるけど、サイトウキネンでは誰が間違えたかまで分かるんだよね」には「さすが…」と感じました。

途中、堀先生と娘さんとでヘンデルのソナタ・2重奏を聴かせて頂きました。「親子で弾くことってなかなか無いんだよね」とのことながらも「う〜ん、やっぱり違うな〜」の一言です。

話は変わりますがチェロのピッチカートの音っていいですよ。バイオリンはピンピン高過ぎるし、コントラバスでは重くて低すぎるし。今回、このピッチカートの話も出ました。「親指でハジく時は左手の指を通常より3倍位強く押さえると良い」という具体的なアドバイスを頂き「いいこと聞いたな」と感じました。

今回、参加者が10名程と少なかったのは残念でしたが充分に楽しませて頂きました。

最後になりましたが堀先生及び準備頂きました事務局の方々、本当に有り難うございました。また参加させて頂きたいと思います。

「全日本学生音楽コンクール」 チェロ部門開催に向けて JCSの皆様へのお願い

河野 文昭

毎年秋には日本音楽コンクール（以下音コン）とともに、同じく毎日新聞社主催の全日本学生音楽コンクール（以下学生音コン）が開催されています。チェロに関して音コンの方は隔年開催ですが、学生音コンにはチェロ部門がありません。昨年来ここにチェロ部門を加えてもらえるよう、コンクール関係者に働きかけてまいりましたが、さらにJCSの応援をいただきたく、ここに紙面を割くことになりました。

私が東京芸術大学に勤めて10年ほどになりますが、大学生だけを相手にがんばっていてもチェロ界全体のレベルを上げることには限界を感じています。桐朋学園のように音楽教室をもち早期から一貫した教育をすることは重要であると考えますが、国立大学では附属高校を

もつことで精一杯です。したがって現在子供たちへのチェロ教育は他に、才能教育研究会と、個人でレッスンをしているチェリストの方々に委ねられているといっても過言ではありません。ドイツやフランスのように、小、中学生を対象にした音楽学校が、今後日本に全国的に設立されることはありえないと思われます。

したがって私が大学で教える時に主眼を置くのは、優秀な演奏家を育てることと、チェロ界の底辺を広げる意識を持って早期教育に積極的に関わっていくことのできる人材を育てることです。今はまだ20年30年先のことを考えて種をまきつづけねばならない時期であると思うのです。しかしながら現時点において、若年層への教育を活発にさせるのに役立つと考えるのがコンクールです。

若いチェリスト本人にとっても勉強の目標になるでしょうし、そのような生徒をもつ先生方にとっても刺激となるものと思います。

教育の中に競争意識を持ちこむことは、とくに若い時期にはよろしくない、という意見があるのは重々承知ですが、現在の状況を見る限りでは、上記のようなメリットの方をとるべきではないでしょうか？

以下に昨年毎日新聞社宛に提出しました、学生音コン開催への要望書をそのまま掲載します。一部内容が重複するところもありますがご容赦ください。



要 望 書

「全日本学生音楽コンクール」において「チェロ部門」を開催していただきたく、この要望書を提出いたします。

近年、日本のチェロ界における底辺の拡がり、またそのレヴェルの向上には、急速ではありませんが着実なものが見られます。その理由として、戦後のチェロ教育の成果が、演奏家のレヴェルの向上と各方面での活躍に表われ、それとともにチェロ教育者が全国各地に拡がって来たことがあげられるでしょう。それに加えて大きな役割を果たしてきたものにコンクールがあります。コンクールによって競争心を煽ることは教育上好ましくない、という意見があることはもちろん承知の上ですが、やはりコンクールを大きな勉強の目的にして日々、切磋琢磨することが大きな効果をあげることも事実でありましょう。

これまでに「日本音楽コンクール」が、一番大きな力でチェロ界を後押ししてきたことは、もちろん言うまでもありません。「音コン」70年の歴史の、そのすでに第二回目からチェロ部門が開かれていることを見れば、いかにチェロ部門が大切に考えられてきたかがよくわかります。

ところで現在、日本で行われているチェロのための主要なコンクールには次のものがあげられます。

1. 日本音楽コンクール「チェロ部門」
日本で最も歴史のあるもの、隔年開催。
2. 兵庫県養父町主催「ビバ・チェロコンクール」
 1. の開かれない年に隔年開催。
3. 北海道弦楽教育研究会主催「札幌ジュニアチェロコンクール」
毎年開催。今年で12年目だが、来年度の開催が危ぶまれている。
4. 大阪府泉佐野市主催「泉の森コンクール」
国際部門（4年後に開催予定）とジュニア部門。
ジュニア部門は今年5月に第一回開催。毎年開催の予定で、来年5月の開催は決定されている。

若いチェリスト達にとってこれらのコンクールの存在はたいへんに大きく、年齢とともにひとつひとつのステップを上がっていくうえで、それぞれのコンクールが重要な役割を果たしているといえます。年齢制限の設定

から、1. と2. そして4. の国際部門は主に大学生と一般社会人を、3. と4. のジュニア部門については18歳以下の者を対象にしたコンクールであるといえます。

ところが、3. については主催者（ヴァイオリン指導者の方々）の献身的なヴォランティアによって支えられており、また経済的な基盤がまったく弱い状態で、来年度の開催が未定であります。4. についても主催が自治体であり、市政の状況によってはいつまでコンクールが継続するか、という点に疑問が残ります。

さて現在、チェロ界のレヴェルは少しずつ向上してきた、と申し上げましたが、欧米のそれと比べると、その格差はまだまだ大きいといわざるを得ません。更なる向上を目指すには、まず底辺の拡充を図ることが急務であり、今、若い（18歳以下の）チェリスト達が毎年、参加することのできる安定した場が必要である、と考えます。そのために「全日本学生音楽コンクール」にチェロ部門を開催していただき、全国的な規模で奨励がなされるならば、さらにいっそうコンクール参加を希望する者が増え、各地の指導者の意識も高まり、演奏のレヴェルも向上してゆくに違いないと確信し、ここに切に要望する次第であります。

2001年11月18日

東京芸術大学音楽学部助教授、チェリスト 河野文昭



お読みいただいて現在のコンクールについての状況がわかりいただけたと思います。

この中で「札幌ジュニアコンクール」の開催が危ぶまれていると書きましたが、案の定、昨年度をもって終了となってしまいました。「泉の森」の方は、今年5月に開催され、また来年5月の開催も決定しており（※事務局注、この原稿を河野先生が書かれたのは昨年です）、こちらは順調に回を重ねています。したがって春に「泉の森」、秋に「学生音コン」とあれば理想的であると思います。

さてJCSの皆様には、まず以上の点について御賛同いただけるかどうか、また御賛同いただけたとして、JCSとしてどのように後押しができるのかというアイデア等、ご意見をお寄せいただきたいと思います。コンクールの必要性をお感じになった具体例などでも結構です。皆様のご意見を多数まとめて次回毎日新聞を説得する時に提出すれば、それでも強い後押しになると思います。毎日側の運営委員である三善 晃氏、岩井宏之氏はチェロ部門の必要性をご理解いただいております、開催に向けて動いて下さっています。問題は開催側の費用にあるようです。また開催方法についてもヴァイオリンやピアノ部門のように全国各地で予選、本選を行わずに、少ない日程で場所も限り、できるだけ費用がかさめよう行っているかどうか、と提案しました。その点につきましてもご意見をいただければ幸いです。ご意見はJCS事務局宛か、あるいは私宛に直接、お気軽にお寄せ下さい。

河野宛先 FAX 03-3807-1135

E-Mail HZD02727@nifty.ne.jp

倉田澄子先生

SPECIAL INTERVIEW

インタビュアー：菅田克彦さん

(11/26 於サントリーホール)

この日は、以前に倉田先生のレッスンを受けた経験もお持ちの菅田さんによる、倉田先生へのインタビューです。リサイタルに教授活動にと両面でご活躍されている倉田先生に、縦横無尽に語りつくしていただきました。後半には、アマチュアチェリストにとって「ナルホド！」と思えるような奏法のヒントになるようなお話も。

菅田氏（以下、－）：本日はよろしくお願いします。チェロ協会にはプロの方もアマチュアもいらっしゃいますが、今日はやはりアマチュアの視点から色々伺いたいと思っています。まず…すこし古い話になりますが、倉田先生はアマチュアや初心者向けのレッスンビデオを出されていますよね。（ご存知の方も多いと思いますが、楽器店などでロングセラーとなっている、2巻もののビデオです）あれは、当時としては画期的なものだったんですよね？

倉田先生（以下、K）：1巻目のほうはペンション・セロ（山中湖、チェロ協会会員：堀口さん経営）で収録したんですが、「白鳥」を弾いていると小鳥が寄ってきて…まるで一緒にピーピー歌ってくれている様で感動しました！ 小鳥達も分かるのかしら？ 不思議ですね。

－1巻目は技術的なことを具体的に解説した内容で、2巻目はアマチュアの好きな曲、弾いてみたい曲を集めたものでした。実は僕も「白鳥」を弾かせてもらったんですけど、撮りなおしナシの一発撮りで、失敗も何もかもそのまま、という…もう悲惨でした。いい機会なので『会報』紙面で言い訳させてください。（笑）

K：ごめんなさいね。私は台本どおりにするのは苦手ですので…

－一拍早く出た人の分もそのまま、でしたよね。

K：進行も全部自由にその場でやらせていただいたので、弾かれた皆さんはそれは緊張されたと思います。あの続きをとということも言われましたけれども、何か新しいアイデアが出たら、またご一緒にやりましょう。

－先生は、桐朋での教授活動をはじめプロを目指す人と、我々のようなアマチュアに手ほどきして下さるときと、どんな点を変えていらっしゃいますか？

K：精神的にはまったく同じですよ。子供でもおじいさんでも、まったく同じ。相手が誰であれ、すごい夢中になってしまう。（菅田さんは）ご存知だと思うけど…

（笑）例えばね、それこそ「白鳥」が弾ければいい、一生「白鳥」一羽でいいです、という人がいたとして、でもそれなりの基礎とか音出しだとか、その人の可能な限りのベストを引き出せたらいいなあと。不遜な言い方か

も知れないけど、そう思うわけ。そうすると夢中になってしまうんです。

－それでいくと、プロでもアマでも一緒ですよ。

K：例えば2のものの宿題を出して、2だけ持って帰る人、うんと頑張って3とか4にする人、2あげても1だけ持って帰る人、0の人。習うほうの責任もあるでしょうけど、こちらがその人からどれだけ引き出せるか。そこに非常に興味がありますし、責任がある訳です。生徒のお母さんから言われたことがあるんだけど、私が白衣を着た女医さんみたいでこの病気にはこのお薬とかって感じでエチュードをもってきたり、それで、それが次のときによく効いていた、とか。そうかと思うと、ずーっとその子が音のイメージを掴むのを待って、夢が膨らむといいなあとと思って、じっと忍耐してみたり。その日に、その子と向きあって音を聴くまでどういう風にすることは決まらないですね。

－やはり先生は、その時その時なんですね。

K：そう。1回1回の出会い、音の出会いとか、その子の目の輝きとか。メンタルなものとか。音を聴くと、スグに分かったらうの。「ああ何か悩んでるな」「何か心に抱えてるな」とか。そうすると、やっぱり家庭に事情があったりします。そうして様子を見てみると、親にも言いにくい話をポツポツ話しはじめたり…その気持ちをほぐしてあげてからでないと、音が硬いまま。そんな日もあったりね。

－なんかカウンセラーみたいな部分も…

K：特に子供の場合は、殆どがそれ。その子の精神状態＝音ですから。勿論、練習方法の問題は別ですけどね。

－それを（処方してくださる事を）蓄積していけるかどうか、ですね。我々アマチュアもいちおう技術的な向上を図りたいとは思ってはいるんですけど、ある程度で満足してしまうところが…なかなかこ難しいエチュードを弾く気になれなくて…

K：もちろん（アマチュアの方のテクニックだと）弾ける曲はある程度限られるかも知れませんが。プロとアマチュアの違いがあるとすれば、そこかな。だけど「あの音がほしい」というその要求は同じだと思わない？

子供達によく言うんだけど、「あなたのそれは、その辺にある音でちっとも面白くない」、「いつでも拾えるのじゃなくて、もう手の届かない、あの素敵な音が欲しいって思っていない」って。「手っ取り早く昨日までの音で弾いてるじゃない。それじゃ何も喜びもないんじゃない？」とかね。それを裏返すと、要求があるとテクニックもついてくるんですよ。これじゃ表せないから「どうしてこの弓の返しがうまくいかないだろう、音が繋がらないだろう」と。「もっとのびが欲しい、（音に）色が欲しい」となると、ヴィブラートのことやボーイングのこと… etc. 心に響くものを欲しいかどうか、ではないでしょうか。子供は子供なりの人生経験で、60才は60才で違うけれども、その時の最高を求めているかどうかということですね。

また子供を教えるときによく言われることなんです、

その子の3歩以上先を行ってしまったらもうついて来れないし、でも同じとこを歩いてると引っ張れない。後からたまには押し、でも、いつも後にいると安心してしまふし、その辺をいつも結構みてて見抜かないといけない。教えることはまさに心理学だなあと感じます。

＊ ＊ ＊

ここからしばし、倉田先生が中国を訪問されたお話をいろいろと聞かせていただきました。このたび倉田先生は、「第4回チャイコフスキージュニアコンクール」の審査員として中国政府から呼ばれて、中国を訪問されました。(2002年10月に2週間の日程で)中国の全国紙の1面に、コンクールの様子が取りあげられていたり、ミネラルウォーターのペットボトルのラベルにチャイコフスキーの顔が印刷されていたり…現地はかなりのフィーバーぶり。コンクールの審査をされた感想としては、10才〜16才の各国(中国、韓国、ロシア、アルメニア…etc)の出演者のレベルの高さに驚かれたそうです。「コンクールは第1ラウンドで25分かけて色んな種類のものを聴きました。叙情的なうたのものとテクニカルの小品とね。第2ラウンドではバッハもあるし、古典のソナタも弾けないといけないし、本選のコンチェルトはオケ伴だし。それはもう小さい子供達にとってこのプログラムをこなすのは大変。本選にいけなかった人の中にもテクニックも表現力もすごい子がたくさんいましたよ!本当に素晴らしい経験をさせてもらいました」とのことでした。

＊ ＊ ＊

―あとせっかくの機会ですので、技術的なことも少し聞いておきたいと思います。やはり私なんかは、プロの人が弾かれるのをみてて違うなあと思うことのひとつが左手の運指です。ちゃんと教育を受けている人というのは、どこの位置にいても指の形がいつも同じになっていて、常に極めて効率がいいと言いますか合理的な運指がなされてますよね。特にハイポジションなんかに行った場合でも同じような形で指が動くところが、違うなど。

K:スケールは練習しますか?

―スケールも第4ポジションくらい迄はやるでしょうけど、そこから上のスケールは中々しないですね。

K:楽器屋さんが面白いことを言ってたんだけど、指板がデコボコになってくると時々削ってもらいますよね?そうすると、もうパッとみてその人が普段どこまで使ってるのかというのが…プロの人でも「あ、この人はちょっと勉強不足の人だ」とか面白いように分かってしまうそうです。

―アマチュアのチェロ弾きというのは、D線までのハイ・ポジションは殆ど使わないというのが分かってしまうんですね。さて話は変わりますが、アマチュアは音が飛ぶときに大体感覚で取る、とか、飛びつく。飛びついて当たればいい、みたいな。

K:例えば音が飛ぶ所で(指で示しながら)1↘3と飛ぶでしょ。「行くぞ」って行く指のことだけ考えるからコワくなってしまう。まるですべり込みセーフみたいになってしまうでしょ。だから実は送る指(1)がどのくらいまで行ってあげたら(3が)届くか、という考え方



で練習してみると、多少ハズれても調整ができる。そういうことは言えるかも知れません。

―アマチュアはその(音を出している)指はなんとか指板に乗ってるんだけど、他の指はバラバラっていうケースが多いんですよ。

K:指がグループで取れてないのかも知れませんが、音程が取れないのが悩みという人がアマチュアの人には多いですよ。例えばバッハのプレリュードの1番、で♪ソレシラシレシレ…と出るところ、この1の指が高い人が多いでしょう?あれって、G-durのGを弾いてあげて「これに溶け合う音を拾ってみて」というと、自分で指を動かしてみても「あぁ!なるほど」とちゃんと見つめますね。そうして自分の耳と身体で覚えたことは忘れないし自信がつくんです。「シ」だ「シ」だと(単独の音を取ろうとして)1の指の向きが悪いとか直しているうちは、難しいけれど、そんな風に耳から聴いてみてダブルの中に溶け合う音程が正しい音程と思えば、取りやすいんですよ。ハーモニーに溶け込む音程をとっていこうとすると、カルテットをしても困らないしね。

―目からウロコですね…。ちょっとした事のようにでいて言われないと中々分かりませんからね。右手のことも伺いますが、右手って言うのは肘の運動もあれば手首の運動もあって、色々うまくミックスされてはじめてスムーズに移弦できますよね。頭では分かるんですけど、どうバランスよく弾けばいいのか悩みます。

K:弓のスピードと重さが平均したときに平らな音が弾けるわけでしょう。そのどちらかがバランスがくずれると上手くいきませんよね。それから移弦は弓の角度の問題もあるし…弓は先が細いから普通に弾けばヌケますよね。そこで、平均して聴こえさせるためには、弓の先では人知れず少しクレシェンドするわけ。クレシェンドするときは、少し右肩を柔らかく使ってみるといいと思いますよ。(紙面ではなかなかお伝えしにくいんですが、実際に弾く格好をされつつ)

―ところで、倉田先生の2003年のご予定は? また今後とくに力を入れていかれたい事はどんなことでしょうか?

K:今後何をやりたいかというのは自分の心の中にはCelloに限らず色々ありますが…2003年は、まず春先にレコーディングがありまして、これはフランス音楽のプログラムになる予定です。4月に小澤征爾さんのオペラ

プロジェクトがあって、あと5月に大阪で「泉の森ジュニアチェロコンクール」。これは責任者の1人としてやらせて頂いています。夏には白馬でセミナーなどもありますし…でも時間的にはやはり演奏活動よりも教える方のウエイトが高いです。いま、若い未来のある子供達を教えるのが自分にとって生き甲斐になっていますから……。

ーまだまだ伺いたいことがありますが、時間もきたようです。本日は有り難うございました。

情報コーナー

デュオ・ハヤシ リサイタル

2/27(木) 19:00開演 ザ・フェニックスホール

出演: 林俊昭 (Vc)、林由香子 (Pf)

入場料: 全席自由4000円

お問合せ: 0794-28-1699 (中村)

ヴィルトゥオーソ・ソロイスト・3

チャイコフスキー「フィレンツェの思い出」

2/28(金) 19:00開演 J Tアートホールアフィニス

出演: 上村昇 (Vc)、古川展生 (Vc) ほか

入場料: 全席指定3000円

お問合せ: J Tアートホールアフィニス 03-5572-4945

ハーゲン弦楽四重奏団

3/1(土) 15:00開演 紀尾井ホール

出演: クレメンス・ハーゲン (Vc) ほか

入場料: S 7000円 A 5000円 学生3000円

お問合せ: ジャパン・アーツ 03-3499-9990

マリオ・ブルネロ&オーケストラ・ダルキ・イタリアーナ

3/14(金) 19:00開演 トッパンホール

出演: マリオ・ブルネロ (Vc、指揮)、オーケストラ・ダルキ・イタリアーナ

入場料: 全席指定6500円 学生3000円

お問合せ: トッパンホールチケットセンター 03-5840-2222

チャイコフスキー「偉大な芸術家の思い出に」

3/25(火) 19:00開演 J Tアートホールアフィニス

出演: 上村昇 (Vc) ほか

入場料: 全席指定3000円

お問合せ: J Tアートホールアフィニス 03-5572-4945

ロリン・マゼール指揮バイエルン放送交響楽団

4/8(火) 19:00開演 サントリーホール

出演: ハンナ・チャン (Vc)、ロリン・マゼール指揮、バイエルン交響楽団

入場料: S 18500円 A 16000円 B 13000円 C 10000円
D 7000円 学生5000円

お問合せ: ジャパン・アーツ 03-3499-9990

ハンナ・チャン チェロ・リサイタル

4/12(土) 18:00開演 サントリーホール

出演: ハンナ・チャン (Vc)、ダリア・ホヴォラ (Pf)

入場料: S 6000円 A 5000円 B 4000円 C 3000円 学生2500円

お問合せ: ジャパン・アーツ 03-3499-9990

園田高弘ベートーヴェンツィクルス

～室内楽Vol.1～チェロ・ソナタ

4/18(金) 19:00開演 トッパンホール

出演: 園田高弘 (Pf)、藤森亮一 (Vc)

入場料: 全席指定5000円 学生2000円

お問合せ: トッパンホールチケットセンター 03-5840-2222

<エスポワール>趙静 V o l . 3～室内楽～

4/21(月) 19:00開演 トッパンホール

出演: 趙静 (Vc)、堀了介 (Vc) ほか

入場料: 全席指定4000円、学生1500円

お問合せ: トッパンホールチケットセンター 03-5840-2222

グスタフ・マーラー・ユーゲント・オーケストラ

4/24(木) 19:00開演 東京オペラシティコンサートホール

出演: ジャン＝ギアン・ケラス (Vc)、ピエール・ブーレーズ指揮、グスタフ・マーラー・ユーゲント・オーケストラ

お問合せ: カジモト・イープラス 03-5749-9960

事務局よりお知らせ

日本チェロ協会の倉田澄子先生を通じて、「国際交流基金」からの要請で2003年4月より1年間、中国・長春の吉林芸術学院にてチェロを教えられる人はいませんか、との紹介依頼がきています。チェロを正式に勉強された方でご興味のある方は、倉田先生または日本チェロ協会事務局までお知らせください。

編集後記

早いものでアツという間に2003年が幕を開けました。事務局の編集の力量はさておかせていただくとして、インタビューに登場くださった倉田先生、サロンを主宰いただいた堀先生、そしてジュニアのコンクールにも力を注いでおられる河野先生と、今号も先生方のご協力を得て盛りだくさんとなりました。引き続き閉塞感に満ちた日本ですが、皆様のご参加ご支援を得てチェロ協会は今年も明るい1年にしたいと思います。本年も何卒よろしくお願いいたします。

日本チェロ協会会報 (JCS NEWS) 第16号

2003年1月31日発行

発行: 日本チェロ協会

東京都港区赤坂1-13-1 サントリーホール内

電話 03-3505-1001 FAX 03-3505-1007

発行人: 堤 剛

編集: 日本チェロ協会事務局

編集協力: リュウカンパニー